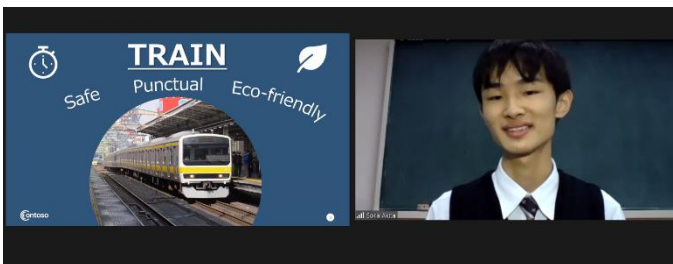


プログラム冒頭、国連勤務経験をもつ富田敬子学長が開会メッセージ。SDGs 策定に携わった立場から、今回、初めて SDGs を共通テーマに掲げ実施するプレゼンテーションコンテストに、果敢にチャレンジしてくれた高校生7名に、心からエールを送りました。

あきた

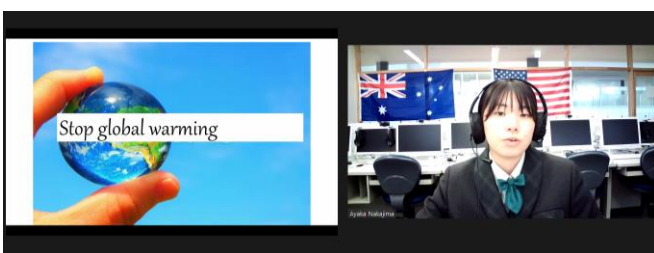
秋田 そらさん (古河中等教育学校5年生)
“Train Can Change Our Society”



SDGsゴール11、ターゲット2「持続可能な都市とコミュニティ」に焦点を当て、CO2排出量を大きく削減する交通システムとして「パーク&ライド」を紹介。自宅から最寄り駅までは車で移動し、都市部への移動は、安全で時間にも正確、環境にやさしい鉄道を利用する方法は、ヨーロッパでは広く普及しているのに、日本では広まっていません。ソーシャルメディアでの広報や、地域の店舗の協力など、身近なところから情報発信することを提唱しました。

なかじま あやか

中島 綾花さん (常磐大学高等学校1年生)
“Stop Global Warming”



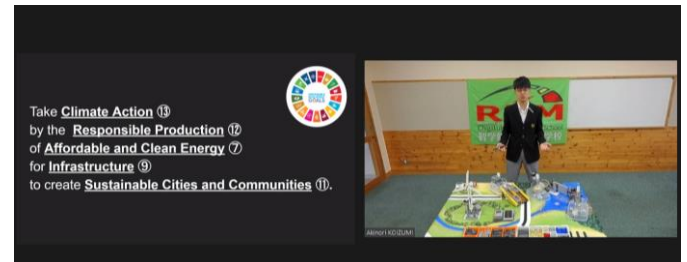
水害、砂漠化、海面上昇—地球温暖化がもたらすこれらの自然災害が、世界各地で深刻化する現状を指摘。ツバル共和国では、満潮時に住宅が浸水したり、海岸侵食(海水汚染?)でヤシの倒木が止められない状況も紹介しました。地球環境を保全するために私たち一人ひとりが生活の中でできることとして、エコバッグの利用、使用電力の削減、自家用車の利用頻度の低減、など、日常生活で取り組める具体的な行動を提案しました。



MCを務めた常磐大学人間科学部健康栄養学科2年の小出弓加さん(右)と常磐短期大学幼児教育保育学科1年の小松崎愛莉さん(左)。堂々と、そして和やかな雰囲気、スムーズに進行役を務めました。

こいずみ あきのり

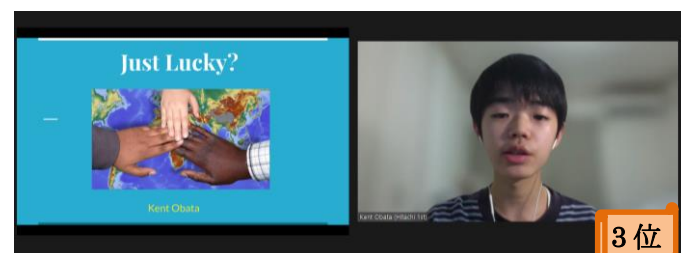
小泉 彰徳さん (智学館中等教育学校5年生)
“Bring Back Taisho & Showa Technology!”



ユネスコスクールでの活動をきっかけに、「何か行動を起こさなくては」との思いで、気候変動に着目してきた小泉さん。CO2排出削減に資する様々なエネルギーシステムを、3か月をかけてレゴブロックで制作したパノラマ模型で紹介しました。太陽光発電はもちろん、ウォータージェット、風力タービンなど、環境にやさしいエネルギーについて考える機会を共有。小規模水路での発電システムや水の重さだけで動くケーブルカーの実演にも熱が入りました。

おぼた けんた

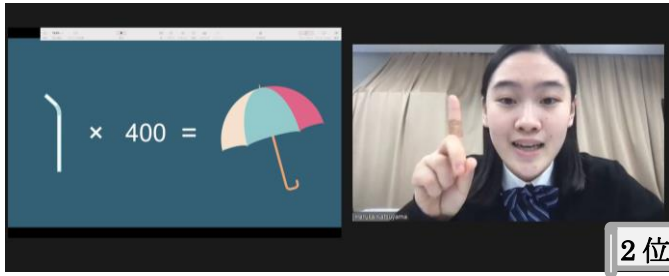
小幡 謙徒さん (茨城県立日立第一高等学校2年生)
“Just Lucky?”



「日本に生まれることは、人生の始まりに宝くじに当たったようなラッキーなこと」というSNSの書き込みに疑問をもった小幡さんは、自身が帰国子女として日本で抱えた葛藤と絡め、「ラッキーなこと」で済ませてよいのか問いを投げました。ある国に生まれたことで難民となり、健康、福祉、教育を手でできない人々は世界で2,400万人以上。難民問題を他人事にせず、損得抜きに支え合う社会を実現することは、自分達若い世代の「高貴な義務」だと訴えました。

かつやま

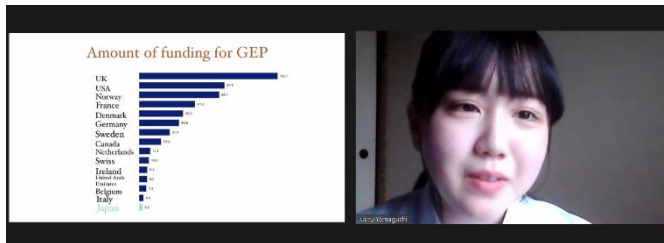
葛山 はるかさん (三田国際学園高等学校2年生)
“Think Big”



外出先での突然の降雨に、近くのコンビニや薬局に駆け込みビニール傘を購入する人が多いことを問題視。安易に手に入るビニール傘は、簡単に壊れ廃棄されます。丈夫で何度でも使えるジップロックを傘に再生するプロジェクトに出会った葛山さんは、学校でジップロック回収を始動。さらに、傘を共有する「相傘」のアイデアも共有しました。環境問題を自分事として意識し、身近なところから行動を起こし、できるだけ多くの人にアピールし続けていく決意を披露しました。

やまぐち じゅえる

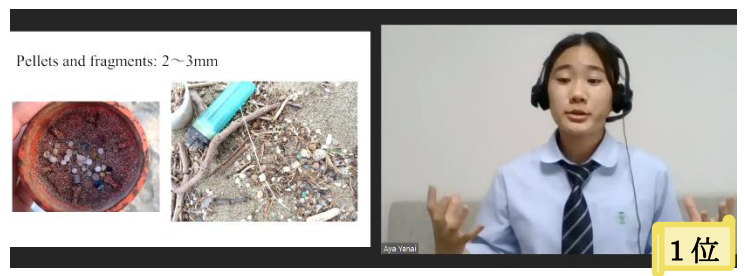
山口 純絵流さん (淑徳巣鴨高校高等学校3年生)
“Fair Education”



SDGsのゴール4「質の高い教育をみんなに」に結び付け、「公平な教育」をテーマに、紛争や戦争、貧困、教師や学校の不足などが理由で、学校に通えない子どもは世界に1億、読み書きができない人は7億を超える現実を指摘。コロナ禍で普及したオンライン授業も、受けられず「置き去りにされた子ども」の数は4700万人との報告も紹介しました。教育は、「持続可能な社会」を創るためにすべての人に必要なこと。先進国が財源を拠出し、途上国の子どもたちの教育を支援するGPE(Global Partnership for Education)も紹介しながら、私たち一人ひとりができる細やかな協力もあるはず、と訴えました。

やない あや

箭内 阿弥さん (渋谷教育学園幕張高等学校2年生)
“How to Reduce Millions of Marine Debris”



テーマは、SDGsのゴール14、ターゲット1「あらゆる種類の海洋汚染を防止し大幅に削減する」。箭内さんは5年前から毎月、学校のクラブメンバーと幕張海岸の清掃を実施。砂に混じった微細なプラスチックやガラスの破片を丁寧に回収しながら、トランクや冷蔵庫といった粗大ゴミを回収することも。約2時間の作業で集めるゴミの量は20~30kgになります。クリーンで持続可能な海を取り戻すには、私たち一人ひとりが陸での生活でゴミを最小限にし、適切に処理する責任があると、実践体験から力強く発信しました。

Free Q&A Session



審査時間を利用して、本学カイル・ミハレス職員が交流セッションの司会進行を担当。審査員とは異なる視点で、テーマ設定のきっかけや気になった内容について質問をしまいました。オンラインながら、参加者同士が距離を縮めた交流の場となりました。



審査員を務めた人間科学部ケビン・マクマナス助教による総評。発表者それぞれ、テーマを深めた綿密な調査、さらに自分自身の経験や実践を土台に、自信に満ちた発表で、質疑応答にもしっかり対応し、非常にレベルの高いコンテストとなったと結びました。

